
タイトル未定

柊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タイトル未定

【Nコード】

N9332Y

【作者名】

柊

【あらすじ】

ある休日それが起きる。俺が起きると信じられない、いや、信じたくない光景が目飛び込んでくる。誤字脱字があれば言っていたけると嬉しいです。感想など書いていただけると舞うほどうれしいです。

終わりの始まり

ちつ、外が騒がしいな。休日位ゆっくりと寝させてほしいものだが、朝食を取った後眠くもう一度寝ていたが、時間帯午前11時くらいだろうか。

外の騒がしさのせいで目が覚めた。

何だろうか、騒がしいと言つか悲鳴のようなものが聞こえる。はつきり言って煩いし、迷惑だ。

・・・何かおかしい。悲鳴が聞こえた、それじゃない。もっと、根本的に何かが・・・そうだ、悲鳴が大勢多数のものだった気がする。

何処からだ？

その疑問の答えを見つけるべく俺は窓から外を見た。

「ははっ、なんだこれ。」

俺の目に映ったその光景は信じがたいもので。

そして、同時に自分の目を疑いたくなるようなものだった。

「人が人を襲っている・・・？」

逃げ惑う人、そしてそれを追う者二種類の人間に分かれていた。

「おいおいおい、どうなってんだよこれはよお。」

夢の続きか？そうだとっても悪夢の類だろうか。

いやいやどうする、どうしたらいいんだ？

考えていると家のドアが開く音がした。

あれが入って来たか！？

しかし、予想とは裏腹に入って来た者は違った。

「おい、大丈夫か？いや腕を怪我しているのか。」

入ってきたのは、20代くらいの男性で腕を怪我していた。
何かに引き裂かれたような感じだった。

「おい、何があつたんだ。説明してくれ！」

だが、入ってきたのは男性だけに止まらなくそれは叶わなかった。

「ちっ、追われていたのかよ。」

男性は逃げてきたらしく、奴らが入ってきた。

ここは逃げるしかないか・・・ない！！

俺は靴を手に取りすぐに自室まで戻り、ベッドの下からバックを取り出した。

震災などに備えて用意していたバッグがこんなところで役に立つとはな。

「これも持っていくか。」

そう言い取り出したのは刃渡り15cm程のナイフだった。
それをベルトで腰に付け窓から外に出た。

「まったく。夢じゃないんだよね？」

相変わらず、おかしい状況が続いていた。

道には奴らしかいないんじゃないのか、と錯覚してしまうほどだった。

いや、実際に人と言えるような者は皆逃げたのだろう。

「ここに居たらまずいか。」

だが、だからと言って何処に行こうか？

「うわあああああ」

そう考えていると男性の悲鳴が聞こえた。

悲鳴の聴こえた方へ目を向けると予想通り男性が襲われていた。
男性は捕まれている抵抗できないでいたようだ。

ちっ、やるしかないか!!

「おらあああああ!!」

ナイフをホルダーから抜き、後ろから心臓を刺す。

人を殺すなんて初めてなんだが……いやもう人とは呼べないか。

「おい、大丈夫……!!」

たしかに心臓を刺したはずだ。いや、人体の構造について詳しい知識があるわけではないが
心臓の大体の位置位は知ってるつもりだ。
なら・・・なんで

「なんで動いてるんだよ!!??」

おかしいおかしいおかしい

そいつは首を後ろに180度回転してこちらを見ている。
その瞬間頭の中で警報が鳴り響く。

くそっ、心臓で駄目なら・・・頭はどうだ!

そして奴の目からの脳まできに向かってナイフを突き刺す。

これでもダメか・・・?

そう思っていたが奴は力を無くした。

「はぁ、はぁ、はぁ。おい、あんた大丈夫か?」

見たところ腕を怪我していた。見た感じ食い千切られたような傷だった。

「とりあえず歩けるか?ここに居たらまだ危険だろうから。
って、聞こえてるか?」

何処か様子がおかしい。問いかけても全く反応しない。
そろそろ痺れを切らし、措いて行こうかとも考えていた時・・・

「ん？」

反応がなかった男性が目を見開き、こちらを向いた。そして、そのまま俺の腕を掴んできた。

なんつう腕力だよ。かなり握りしめられている。

男性は俺に顔を近づけようとして・・・

「！！」

俺は一瞬で判断を下し男性の目をナイフで刺した。正確に言うならば、男性の頭を目がけて・・・だ。

「クソツたれが！！」

間違いない。こいつもあいつらと同じように俺を噛もうとしてきやがった。

男性が力尽きたのを確認し、ナイフを抜いた。

「とりあえず何処かで考えをまとめよう。」

そう言い何処か気休めの安全な場所を探すことにした。

終わりの始まり（後書き）

こんな感じの小説です。

暖かい目で見てもらえると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9332y/>

タイトル未定

2011年11月27日22時56分発行